

## 解説（海外報告）

## イスタンブールの街と建築

南 泰 裕\*

## Town and architecture in Istanbul

Yasuhiro Minami\*

**Abstract:** The paper reported the aspect of town and architecture in Istanbul in Turkey. Istanbul is well known as a historically important city connecting Asia and Europe. Three places named Old Town, New Town and Asian side, face each other across the Bosphorus strait. In addition, each place is covered with maze-like roads and slopes along complicated terrain, and it has a unique urban structure. In the old days, as the capital of eastern Roman Empire, Constantinople richly developed Byzantine culture, among which a masterpiece of Byzantine architecture like Aya Sophia was born. Later, by the occupation of the Ottoman Empire in 1453, Christian culture and Islamic culture was complicatedly mixed, creating a unique culture.

In this paper, from March to September 2015, through the experiences of researching and staying at the Mimar Sinan Fine Art University in Istanbul, I would like to report the part of the characteristics of town and the outline of representative architecture, in Istanbul, in addition, report the daily life in downtown and the ordinary urban activity in Istanbul.

**Key words:** Istanbul, Mimar Sinan, mosque, urban structure, water-network

## 1. 世界首都としてのイスタンブール

私たちが普段見慣れている、メルカトル図法による世界地図を眺め渡していると、文明と文化の（特に近代以降の）礎を築いたと目されているヨーロッパ大陸の東端に、東西から指と指を突き合わせるように小さな半島を伸ばし、海をつないでいる特異な一点に目がいく。イスタンブールである。複雑な地形の周りに無数の諸島を抱いて、ヨーロッパ大陸とアジア大陸を切り結ぶように、黒海と地中海を細くつないでいる海峡の一部である。そしてまた、トルコ最大の都市として、世界のあらゆる国と地域から人々が集まり、多彩な文化が混じり合って活動する世界都市である。

そのイスタンブールに、学外派遣研究員として、2015年の3月から9月にかけての約半年間、滞在した。本稿では、その滞在における体験と、そこから得られた考察の一端を記したい。

人口1400万人あまりを擁する大都市イスタンブールが、世界史的にみてきわめて重要な都市であることは言を俟たない。アジアとヨーロッパを架橋するこの地は、

その地理的・地政学的な特異性故に、紀元前の古代よりギリシャの植民都市ビザンチウムとして知られ、文化的にも人種的にも西洋と東洋が多様に交錯し、豊穡な文化を生み出す母胎となった。その豊かさに着目し、魅了された時の為政者たちは、繰り返しこの場所への侵略と征服を試みることになる。そしてその先駆をなすコンスタンティヌス1世が、ローマ帝国の皇帝となった後の西暦330年から、オスマン帝国に完全征服される1453年に至るまで、ほぼ1100年もの間、ローマから遷都されたこの「新ローマ」は実質的な「西欧世界の首都」であり続けた。当時はビザンチン帝国（あるいは東ローマ帝国）の首都コンスタンティノープルとして知られ、西洋の東端に位置するこの場所が、ギリシャ文化やキリスト教の中心地となったのである。

が、1453年にオスマン帝国の君主メフメット2世がコンスタンティノープルを陥落した後は、イスラム教の中心地として世界が完全に反転する。時のスルタン（イスラム世界における君主）たちは、すでに衰退しかかっていたこの地に、インフラや商業施設、モスクをはじめとする公共施設等を一挙に整備し、それに合わせてムスリムが大挙して移住したことで、都市全体がイスラムの文化によって大きく塗り替えられることになった。

このオスマン帝国は、デヴシルメと呼ばれる、地方から有能な人材を集める巧みな登用制度や、統制のとれた

\* 国士舘大学理工学部理工学科  
School of Science and Engineering, Kokushikan University

強大な軍事力、地域を掌握しつつ多様性を許容する独自の政治システムに支えられ、14世紀初頭の帝国成立から1923年のトルコ共和国成立に至までのほぼ600年間、主にイスタンブールを首都として繁栄し、イスラムの多様な文化を育んだ。

こうした歴史的経緯から、イスタンブールは約2000年近くもの長きに渡り、キリスト教とイスラム教の文化が重層しながら東洋と西洋がダイナミックに交叉し、世界の様々な人々が集まる、類いまれな「世界首都」であり続けたのである。

## 2. 'Welcome to Istanbul !'

イスタンブールの地に降り立ったのは、まだ肌寒さが残る3月末の未明だった。基本的には、イスタンブールは一年を通して、東京とほぼ同じ気温である。とはいえ、空港から都内へ向かう道すがら、タクシーの中から見る夜明け前の薄暗いイスタンブールの街は、まだ人影もなく寒々しかった。まずは都心に位置する、オスマン朝時代の重厚なヨーロッパ・スタイルの建築を改装したホテルに宿泊する。ホテルは素晴らしかった。部屋は特別に豪華というわけではないものの、改装デザインのセンスがよく、石造りの歴史的な外観に、白を基調としたシンプルでモダンなインテリアと、無垢の木を使った古い家具類がよくマッチしていた。ヨーロッパでは、こうしたリノベーションの素晴らしい事例に出会うことが多く、いろいろと刺激を受ける。

朝、屋上を改修して作られたホテルのレストランに上がると、木造による現しの構造材で大屋根を支えた、ガラス張りの開放的で気持ちのよい大空間が現れ、心地よい驚きに打たれた。

ペントハウスのような居心地の良さを生み出している広いレストラン階の、窓際の明るいテーブルで、ゆっくりと朝食を取る。遠くに、イスタンブールの町並みが少し見え隠れしているが、塀に遮られ、まだその全貌はよく見えない。

と、近くのテーブルで、どうやら年配の女性と仕事の打ち合わせをしているらしい、恰幅のよい50代ぐらいの男性が近づいてきて、「どの国から来たんですか」と英語で気さくに話しかけてきた。

こちらが、以前、イスタンブールを訪れてその街に魅了されたことや、日本の大学から来たこと、建築と都市の研究でイスタンブールに訪れたこと、これから半年間、こちらの大学に籍をおいて滞在するなどを話すと、その男性は、「自分はこのホテルのオーナーです。宿泊して下さって感謝します」と言った。そして、打ち合わせ中の女性を呼んで、すぐに紹介してくれた。

その女性は、たまたま、イスタンブールのとある私立大学の准教授だった。名刺交換をして、しばし、お互いの自己紹介と歓談。どうやら、ホテルに関わる何かのイ

ベントの打ち合わせを、そのオーナーとしているらしい。が、その詳細は聞かなかった。このホテルがその後、イスタンブール全体を会場として大々的に開催されることになる、国際的なアート・イベントである、イスタンブール・ビエンナーレ2015の会場の一つとなることを知ったのは、帰国間近の半年後のことだった。

朝食を食べ終え、コーヒーのおかわりを飲み終えて部屋に戻ろうとすると、オーナーの男性が再びテーブルにやってきて、握手の手を差し伸べながら、笑顔でこう言った。

'Welcome to Istanbul !'

## 3. イスタンブールの地理と地形

イスタンブールという都市を特徴づけているのは、何よりもまずその特異な地理である。アジアとヨーロッパの架け橋として知られるイスタンブールは、約30キロメートルにわたるボスポラス海峡でくっきりと二分されている。このボスポラス海峡は、ロシアにつながる北部の黒海と、ギリシャに至る南部のマルマラ海を細くつないでおり、貿易や文化交流、そして軍事上の要衝として、世界史上を通して常に重要な海峡であった。その海峡の東側がアジア、西側がヨーロッパとなっている。したがって、一つの都市の中に、アジア（アナトリア地方）とヨーロッパ（トラキア地方）という異なる文化が同時存在しており、その両岸を橋や船で行き来する、二大陸の結節点なのである。

ヨーロッパ側の大陸は、さらに金閣湾と名付けられた、長さ約8キロメートルの蛇行する入り江によって、北側の新市街と南側の旧市街に分たれている。その名の通り、旧市街はビザンツ時代より都市の中心であった歴史的な遺構が多数残る場所である。対して、新市街は主として中世オスマン帝国時代以降に開発が進み、当時のヴェネチア人やフランス人等を中心に開拓されてきた場所である。[写真1]



写真1 ヨーロッパ側、新市街から金閣湾を見下ろす。手前に見えるのがガラタ橋

この、新市街・旧市街・アジア側という三つの街が、中央を貫く海峡と入り江に向かって、あたかも三つ巴の生き物のように、渦巻き状に取り巻いてその先端を向き合わせているのが、イスタンブールである。そのため、この3つの岬を寄せ集めると、ぴったりと隙間なく、くっつくような地形をなしている。事実、この地は有史以前のはるか昔には、ひとつながりの大陸であったと言われている。[図1]

この、海峡を取り囲む3つの街、という全体の輪郭に加え、イスタンブールの重要な特徴となっているのは、迷路のように至るところに張り巡らされた複雑な道と、起伏に富んだ地形である。比喩的に語れば、イスタンブールは中央のボスポラス海峡を舞台として、その周りを3つの巨大な屋外劇場がぐるりと取り囲み、見下ろしているような都市構造となっている。つまり、丘状に隆起した、それぞれの街の頂から、海峡に向かって街が下っている。それにより、お椀型に海を緩やかに囲んで、多くの坂と階段からなる、すり鉢状の地形をなしている。そのため、街全体が海峡に向かって視界を開き、常に対岸が視界に入ってくるようになっている。こうした独特の地理地形を通して、唯一無二の特異な都市様相が生み出されているのである。

例えば、大きな川によって全体が二分されている歴史的大都市は、東西を問わず、多くみられる。テムズ川河畔に発展したロンドンや、テヴェレ川添いに展開するローマ、セーナ川を抱くパリなどがすぐに想起されるし、ソウルにおける韓江も、そうした典型的な事例の一つだろう。けれども、大きな海が都市領域をダイナミックに離散させ、そのタブラ・ラサとしての海こそが場所の中心である、という都市は、世界史的にみてもまずイスタンブールの他にないだろう。最も狭いところでも700m余



図1 ヨーロッパ側の旧市街、新市街、および東のアジア側からなるイスタンブール（『都市史図集』（彰国社、1999）より引用）

りとなる広大な海峡故、そこには古くから現在に至るまで、東西大陸をつなぐ橋がかかることはなかった。そのため有史以来、すべての人々はここを船で行き来していた。この都市の北部によりやく、初めてボスポラス大橋が架かったのは、1973年のことである。

このようにユニークな地形的特徴を持つイスタンブールは、ローマを模して「七つの丘を持つ都市」と見なされた。これらの丘は旧市街における中心地を対象としており、第一の丘から第六の丘までは、北側の金閣湾と平行する形で、東から西に向かって並び、岡の連なりを縫うように小山の連峰をなしている。第七の丘のみ、それらの流れからはずれて、南西側に別の小山を形成する形になっている。[図2]

そしてこれらの丘のそれぞれの頂上に、モスクや宮殿等がたてられており、それらは都市の景観を引き立たせる、優れたランドマークとなっている。こうしたことから、時の為政者たちは、古くからこの都市の地形を巧みに読み込んで都市計画を進め、権力や権威のシンボルを効果的に計画していたことが分かる。

この地形を基盤に、やはりローマを模して市街地全体を「十四の区」に分割し、整備されて、現在のイスタンブールの骨格ができあがっているのである。[スケッチ1]

#### 4. ミマール・シナン大学での研究・交流・教育活動

派遣先の大学を訪問したのは、イスタンブールに到着した次の日のことである。現地では、ボスポラス海峡を間近に臨む、ミマール・シナン芸術大学建築学部にも所属し、客員教授という立場で教育と研究の一端に関わらせ



図2 イスタンブール旧市街の起伏を形成する、7つの丘と18世紀頃の主要施設群（飯島英夫『トルコ・イスラム建築』（富山房インターナショナル、2010）より引用）





スケッチ1 ガラタ橋から見た、旧市街の街並み。中央はスレイマニエ・ジャーミー [作画：筆者]

ていただいた。[写真2] ミマール・シナンとは、オスマン帝国の最盛期である16世紀に大活躍した、伝説の建築家である。新市街側の、フンドゥクルという海辺の公園に隣接するこの大学は、1882年に創設された由緒ある大学である。校舎は、かつて宮殿として使われていたもので、それがリノベーションによって、初め、芸術アカデミーとして設立された。その後、イスタンブール国立芸術大学となり、さらに時を経て1980年代以降に、希代の建築家の名前にあやかって、このように改名されたのである。

ここはいわゆる国立の芸術大学で、日本で言えば東京芸術大学のような感じである。学部としては建築学部・芸術学部・教養学部の3つがあり、芸大らしくキャンパスの廊下には前衛的な彫刻や絵画作品がところ狭しと並び、ホールでは学生たちが卓球に興じたりしていて、のんびりとした自由な雰囲気だった。

このミマール・シナン大学は、かつて、ドイツ表現主義の建築家として知られたブルーノ・タウトが教授を務めていた大学でもある。タウトは、社会主義運動に関わっていた経緯からナチス政権に追われ、1933年に日本へ亡命している。そのときに桂離宮や法隆寺、白川郷といった日本の代表的な建築や民家に強い感銘を受け、独自の建築論を展開して日本の古建築を世界に知らしめるきっかけを作った。がしかし、当時の政治的な情勢から日本ではあまり活動することができず、旅行記や論考をものした以外には、ほとんど建築作品を残していない。その後、1936年にトルコ政府に招聘されたのを期に、イスタンブールに移住する。そこで大学で教鞭を執りながら、1938年に亡くなる直前まで、アンカラにおける公共施設を中心に、いくつかの建築作品をトルコに残した。その作品群の中には、ボスポラス海峡沿いに建つ、日本風の意匠を独自に解釈したような、オリエンタルな気配を持つ住宅作品なども含まれており、日本文化へのオマージュが感じられて興味深い。[写真3] タウトはそうように、20世紀の前半において、ドイツ・日本・



写真2 中央の建築がミマール・シナン芸術大学。すぐそばに、ヨーロッパを旅する豪華なクルーズ船が見える。



写真3 中央、ブルーノ・タウトが設計した、ボスポラス海峡沿いのオリエンタル風の住宅

トルコの3カ国を架橋する建築活動を行なったのである。

今回、ミマール・シナン大学に在籍することになり、たまたま、そうしたタウトの来歴が自身の渡航と重なる部分があるように思えて、感慨深いものがあった。

この大学で私は、学内の教授陣と一緒に、大学院の建築デザイン・スタジオの授業指導に参加した。この授業では、トルコ人の大学院生に加え、エラスムス（ヨーロッパにおける国際交流や留学のための組織）によるドイツやフランスその他からの留学生たちが受講しており、毎週、熱心に設計案を持ってきてプレゼンテーションを行っていた。このときの課題は、金閣湾の周辺から、現在、問題を抱える一つの場所を選んで再生させる、というものである。学生の作品には、工場跡地や橋、空き地などを対象に、都市デザインレベルの大規模な計画を提案するような、見応えのある案が多かった。ただし日本のデザイン授業とやや異なるのは、基本的に模型（モデル）を作らないことである。これは大学による違いもあ

と思われるが、大半の学生がCGのみをベースとした設計作業をおこなっており、模型でのプレゼンテーションは基本的になかった。学内の学生に聞いてみたところ、学部の授業も全体の傾向としてほぼ同様らしかった。模型制作の授業はあるにはあるものの、それらの課題作品をみる限り、日本の建築学生の作る建築模型の方が、精度とクオリティがかなり高い、と感じられた。

ともあれ、これらの授業参加に加え、2度ほど大学内でレクチャーを行い、日本の都市空間や自作の建築作品、都市デザイン案などを紹介した。教員や学生たちの関心は高いようだった。トルコは親日国ということもあり、とりわけ建築の研究者にとっては日本の建築と文化に強い関心を持っている人が多かった。同大学の建築の教授の一人が、改めて話を聞きたいとのことで、後日、日本建築とイスラムの建築の差異について、いろいろと質問された。そのときの主要なテーマは、日本の寺社建築とトルコ（またはイスラム）のモスクとの、庭に対する考え方の違いについてだった。

「イスラムの建築の庭は、中庭として閉じており、視線が外に向かないが、日本の建築は、庭が建築の外に広がっている。その違いについて、どのように考えるか？」と、その教授は、表現を変えながら、繰り返し熱心に聞いてきた。

すでに多くの建築研究者たちが様々な形で指摘しているように、日本の寺社建築においては、庭が非常に重要な意味を帯びている。建築が、自律したフリースタANDING・オブジェクトとしてのみ存立しているのではなく、建築としての自律性が、場所への呼応と巧みに調和し、「場の中の建築群」を創り上げている。それによって、例えば「見え隠れ」や「借景」、「雁行配置」といった、日本建築特有の空間的な手法が様々に織り込まれ、建築群が庭と自然の中に溶け込む。そのイスラム建築における視線の求心性と、日本の建築における遠心性は、確かにきわめて対比的であった。

学内の図書室で研究の調べ物をしたり、教授陣たちと研究の話をするにつけ、日本の建築への関心の高さを繰り返し、感じさせられた。それほど規模の大きくない大学ということもあり、図書館自体はなく、図書室もこじんまりしていたが、安藤忠雄や黒川紀章、篠原一男、丹下健三をはじめ、日本の建築家の作品や日本の建築雑誌等はかなり数の、所蔵されていた。建築学部の廊下には、磯崎新のシルク・スクリーンによる、東京都庁コンペ案の古いドローイングが架けられていた。

また、伊勢神宮や桂離宮といった日本の古建築を研究論文で取り上げていた教授は、日本の文化について、かなり詳しい様子だった。学長のデニズ先生は建築家協会の大会等で何度も日本を訪れているとのことだった。さらに、同じ授業を担当していた、建築家で非常勤講師のエサー先生は、大学の食堂で一緒にランチを取っている

ときに、「弟が日本のアニメを通して、日本語が話せるようになりました」と言い、先生自身が、日本文化とその建築について、‘super curious’ だとして、本当にいつか必ず行ってみたい、とのことだった。

この大学は何よりもその立地が最高で、穏やかなさざ波が打ち寄せるボスポラス海峡のすぐそばに位置し、遠くにアジア側の街並やモスクの尖塔を臨んで、夏のからりとした気候の際には、本当にリゾート地のような素晴らしい眺めだった。海に面した、学内の教員用のレストランは、視界がめいっぱい広がって、高級ホテルのラウンジのような、とても気持ちよい場所だった。カモメが空を飛び、ときに海峡をイルカがゆっくり遡っていく姿を見ることもあった。一方で学内には猫が自由に闊歩していて、授業中でもプレゼンテーションをしている学生の前を猫が平気で横切っていたりしたが、それが普通なのだろう、教員も学生も平然としていた。なんとも、のんびりしたものである。

製図室やスタジオは、日本の建築学科と大きく変わるところはなく、学生たちがたむろして図面を描いたり、学生どうしで建築作品についての議論をしたり、教員に指導を受けたりしていた。こうした建築学科・学部の、雑然として活気に満ちた雰囲気は、どの国や地域に行っても同じと感ずることが多く、そのユニヴァーサルな気配には、いくぶん、微笑ましくなる。[写真4]

大学には、住まいのあるアジア側から、船で通っていた。これがまた趣のある通勤で、住まいのアパートから5分ほど坂を下った、ハレムとう名の波止場に出て、そこから船にひょいと簡単に飛び乗る。船はいつも空いていて、のんびりしていた。イスタンブールの人たちにとって、船は欠かせない乗り物で、運転手も手慣れたものである。約10分ほどでヨーロッパ側に着くのだが、乗っている間に、売り子がチャイやオレンジジュースを売りにくる。チャイはその当時で2リラ（約100円）、オレンジジュースは3リラ（約150円）である。甲板に出る



写真4 ミマール・シナン大学建築学部の製図室。教員によるエスキース・チェックが行われていた。



と潮風が気持ちよく、カモメが船についてきて、伴走するように一緒に空を飛んでいるのを、いつも目にした。やがて、遠目に見えていたモスクや宮殿が目の前に迫り、アジア側とはがらりと雰囲気の変った、ヨーロッパ側の旧市街であるエミノニュという埠頭に着く。[写真5] そこからトラムに乗って5分ほどで大学そばの駅に着く。[写真6] 家から大学まで、30分足らずである。こうして日々、アジアとヨーロッパを行き来し、その異なる文化の気配をわずか10分で体感する、という貴重な経験を繰り返すことになった。

ところで私がこの大学に籍を置いているときに、ちょうどトルコ人と日本人のハーフである大野エフラートン君が建築学部で2年に在籍していた。日本語とトルコ語が堪能な彼には、レクチャー時の通訳や街の案内等、いろいろな形でお世話になった。帰国直前の9月半ば、大野君や何人かの学生を対象に、少人数でのミニ・ワークショップを開催した。そこでは、金閣湾の入り江に位置する、ガラタ地区という場所の旧魚市場エリアを敷地として、「East meets West Museum」を設計する、という課題を出した。アジアとヨーロッパをつなぎ、両



写真5 旧市街、エミノニュ埠頭の広場



写真6 旧市街と新市街をつなぐトラム

者の文化を紹介する美術館、という仮定である。即日設計的な短時間での案の作成と、その後の学生たちとのディスカッションは、なかなか面白かった。建築のデザインに対するアプローチの基本は、どの国に行っても同じである、と感じる部分も多かった。むしろ、そのディテールについては、いろいろな文化的・技術的差異があるのだが。形態に関する、立体的な造形感覚については、日本の建築学生の方がやや高いように思えたが、おそらく模型製作に慣れ親しんでいるかどうかの違いもあるのかも知れない。しかし学生たちは皆、やる気があって頼もしかった。

ワークショップ終了後、もう帰国が間近ということで、私が設計した建築作品の図面の一部や、持参した製図用具等を参加学生たちにすべてあげると、とても喜んでくれて、皆が奪い合うようになり、すぐになくなった。特に図面は、日本の設計方法を知る意味で、彼らにとっても非常に参考になったようである。

この滞在中、教員のエサー先生からご招待いただき、トルコ建築家協会が主催する、6月から7月にかけて行われた建築ワークショップに教員として参加した。これは毎年、行なわれているらしく、ビルギ大学やミマール・シナン大学、イスタンブール工科大学、パフチュシェヒル大学など、イスタンブールのいくつかの大学に通う建築の学生たちが大学を横断し、街を対象として行なうグループワークである。

この期間中に、ワークショップに関連して、建築家協会の会館でレクチャーを行った。東京の都市空間をテーマに講義を行い、ワークショップに参加している学生や教員たち約100名ほどが熱心に聴講してくれた。驚いたのは、レクチャー終了後、聴講していたトルコの女子学生の何人かが、日本語でいろいろと質問してきたことである。トルコのいくつかの大学には日本語を学ぶ授業があるらしく、ここでも日本文化への関心の高さを肌で感じるようになった。

そういう次第で、短い期間ではあったけれども、芸術大学の自由な気配の中で、有意義な研究活動と交流をさせていただくことができた。

## 5. イスタンブールにおけるイスラム建築

トルコにおけるイスラム建築は、歴史的にはその文化的重層性から、きわめて複雑な背景を持っている。古くはアラブ諸国や、ペルシア帝国の中心であったイランの文化圏の影響を受けながら、そこにマケドニアやギリシャ以西の複数の文化も加わり、ビザンツの文化と多彩に融合して独自の豊かな文化を生んでいる。

ここでは特にイスタンブールの代表的なモスクに限定して、そのいくつかを紹介しておきたい。

イスタンブールで最もよく知られているモスクとして



写真7 アヤ・ソフィア外観

は、世界遺産となっているアヤ・ソフィアの名前が挙げられる。アヤ・ソフィアは西暦537年にユスティニアヌス1世によって献堂されたキリスト教の礼拝堂である。立地としては、ヨーロッパ側の旧市街の中心である、スルタン・アフメット広場に面して建っている。[写真7]

これはビザンチン建築の最高傑作にして、初期のドーム建築として世界で最も重要な建築物のひとつである。ドーム頂部の高さ約56m、中央ドームの直径約31mの壮大な礼拝空間を内部に生み出しており、その空間の壮麗さには誰もが息をのんでしまう。構造は石造りとレンガ積みによるものだが、これほどの大空間を、当時、532年からのたった6年ほどで完成させており、その技術は驚嘆に値する。その後、様々な改修が行なわれているが、基本的な原型は約1500年もの間、保存されて変わっておらず、歴史が堆積した重厚な佇まいに、圧倒されるほかない。技術的には、「ペンデンティブ」と呼ばれる、球の一部を切り取った曲面三角形により、四方からドームを支える構造となっている。このモスクの礼拝空間は、中央のドームを、東西から二つの反ドームが挟み込む形式となっており、それによって巨大な空間をさらに大きく見せる効果が生まれている。しかしあまりにも巨大なため、その自重によって建設当初からドームは微妙に歪んでおり、東西方向と南北方向のドーム直径はわずかに異なる。[図3]

この礼拝堂が、1453年のオスマン帝国による征服により、突如としてイスラムのモスクに生まれ変わることになる。当時のメフメット2世は占領後、さっそくこの建築をモスクへと改修し、4本のミナレットを付加した。また、礼拝堂の内部空間では、身廊の軸線がわずかにずらされてミフラブ（礼拝のため、メッカの方向に向けられたくぼみ状の設備）が設置され、ミンバル（説教壇）が置かれた。その後、建築家のミマール・シナンもこのアヤ・ソフィアの改修に加わり、構造の補強を含め、様々な要素が付け加えられている。そのため、例え

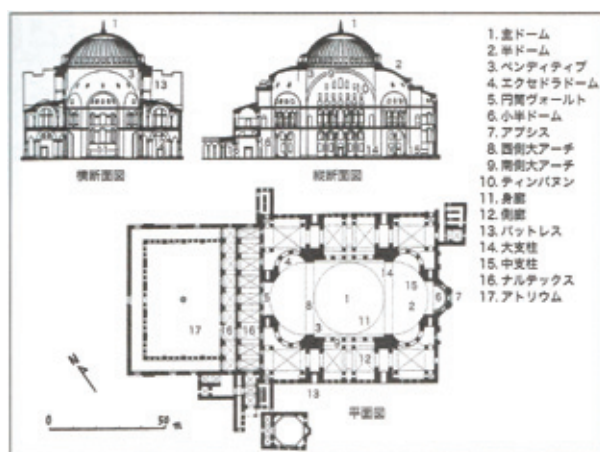


図3 アヤ・ソフィアの平面図および断面図（同図版2と同じ引用）

ば4本のミナレットのデザインがおのおの異なっていたり、巨大なドームを外側から構造的に支える、バットレス（補強梁）が突き出ていると、あたかも建築の歴史の年表がそのまま可視化されたような、ダイナミックな様相を呈している。

その後、紆余曲折を経て、トルコ共和国建国後の1935年以降は、このアヤ・ソフィアは博物館として一般解放されているが、その歴史的経緯と保存状態から、世界的に見ても数少ない、貴重な建築歴史遺産となっている。現在も補修作業が延々と続いているが、あまりに古い遺構であるため、石造りの床は至るところで波打ってひびが入っていた。私が滞在している間にも、初めは自由に行けた2階の一部が、その後、通行禁止になっていたりと、この建築の前を通るたび、国をあげてこの建築を保存していこうとする強い意志が感じられた。

このアヤ・ソフィアと並んで、イスタンブールを代表するモスクのひとつが、スレイマニエ・ジャーミーである。[写真8] ジャーミーとはモスクのことで、このモスクはオスマン朝最盛期のスルタンであるスレイマン1世により、1557年に建てられた。設計した建築家はミマール・シナンであり、シナンはスレイマン在位中の1538年から50年間もの間、宮廷建築家として活躍し、イスタンブールのみならずトルコ各地や他の諸国に至るまで、多くの傑作を生み出した。

スレイマニエ・ジャーミーは、旧市街のうち、「第三の丘」の中腹に、金閣湾を臨むようにして建てられている。イスタンブールのモスクの中で、総合的にみてランドマークとしての存在感が傑出しているのは、間違いなくこのスレイマニエ・ジャーミーである。特に金閣湾を挟んで新市街から眺めるか、あるいは船の上から見ると、このモスクの厳格な佇まいと、天に向かって屹立するその美しさは、言葉にできないほど素晴らしい。オスマン帝国史上、最も華やかで広大な領地を有していたス





写真8 中央にそびえ立つのが、スレイマニエ・ジャーミー。左側に見えるのは、イエニ・ジャーミー

レイマン1世の時代故、このモスクも地理学的に最も重要で効果のある場所を選んで建てられたことが、一目瞭然である。

フランスの建築家であるル・コルビュジエも、東ヨーロッパおよび中近東の調査旅行の際に、このイスタンブールに約6週間滞在しており、そのときの記録が『東方への旅』という書物として残されている。コルビュジエはこのとき、イスタンブールの街の風景に加え、このスレイマニエ・モスクのスケッチをいくつか描いているが、それを見るとモスクは当時とまったく変わらないことが分かる。また、コルビュジエが滞在していた当時は、「ペラ」と呼ばれていた新市街は、まだそれほど整備されておらず、雑然とした街並が至るところに残っていたようである。

ともあれこのモスクは、改修と変更が繰り返されてきたアヤ・ソフィアとは、ある意味で真逆の気配を持っている。建築全体の完成度が極めて高く、あいまいな隙がない。幾何学的にきわめて厳密に設計されていることが見て取れるし、イスラミック・カリグラフィや装飾タイルといったインテリアのデザインも、すべてがきっちりと納まるべきところに納まっており、緻密にデザインされている。ドームの直径は約27m、内部の高さ約54mと、大きさはわずかにアヤ・ソフィアには及ばないものの、ミナレットや中庭による全体構成は、イスラムのモスクの空間的な作法を正に踏襲した形式であり、ほぼ完全なシンメトリー構成になっている。ミナレットは4本建てられており、デザインを統一した上で、2本は76m、残りの2本は56mの高さとしており、それによってメリハリのあるスカイラインを形成している。シナンはこのモスクを設計する際に、アヤ・ソフィアをかなり参考にしたと言われており、中央ドームの東西両側に半ドームをかけ、それによって礼拝空間をより広く荘厳に演出している形式は、確かにその類縁性を感じさせる。

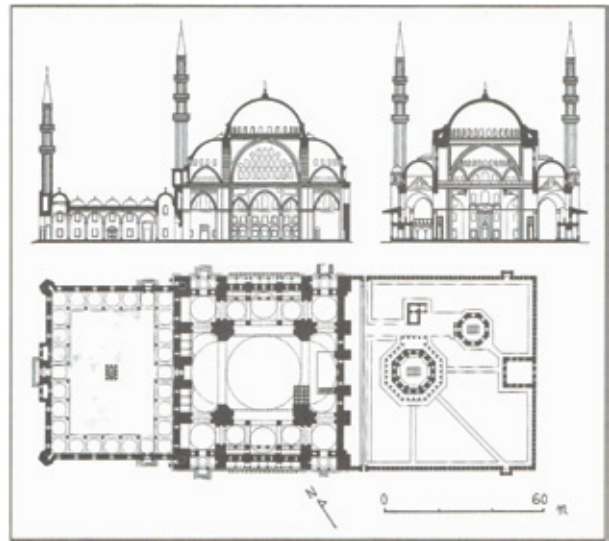


図4 スレイマニエ・ジャーミーの平面図および断面図（同図版2と同じ引用）

#### 〔図4〕

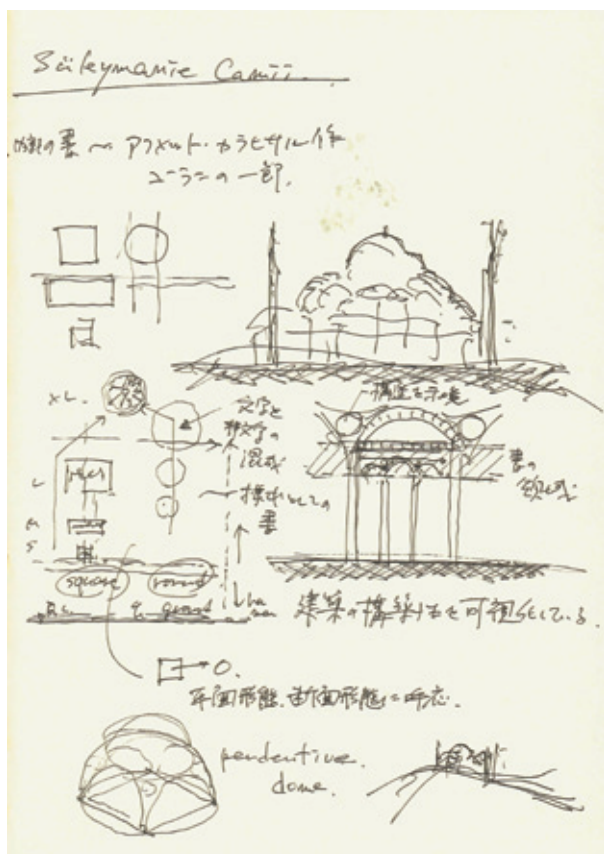
このスレイマニエ・モスクの特徴は、何より内部空間だけでなく、外部のデザインにエネルギーが注がれている点である。白壁にアーチが連なる外観は、決して華美な装飾性が強調されているわけではないものの、外周部にいくに従って小ドームの屋根や袖壁、バットレスといった構造的部位のボリューム感を次第に小さくしていくことで、建築の架構を通していわばフラクタルなエクステリアのデザインを生み出している。これは、近くからの視線に対してはボリューム感を低減させる効果を、遠景からの眺めに対しては、ジグザグのような重厚な存在感を演出しており、様々な次元での、巧みな視覚的效果を意図していることが読み取れる。〔スケッチ2〕

先にあげたアヤ・ソフィアは、現在は博物館として観光名所となっているが、このスレイマニエ・ジャーミーは今も現役のモスクとして立派に使われており、他のモスクと同様、内部空間には一面、カーペットが敷き込まれて、人々が日に5回、ここで静かに礼拝を行なっている。

## 6. イスタンブールの都市構造

前述の通り、イスタンブールは複雑に曲がりくねった路が迷路のように張り巡らされた、坂の街である。しかしそれらの坂は、例えば東京を「坂の都市」と呼ぶような優しい気配とはいささか様子が異なっている。東京が、自然をうまく飼いならして、それを馴化させている「親自然的な都市」であるとするなら、イスタンブールは、荒々しい自然と格闘し、それをねじ伏せて生み出された、「反自然的な都市」ということもできるだろう。全体が、必ずしも自然に抗っている、というわけではないものの、地形をならしてなだらかな路を作り込んでい





### スケッチ2 スレイマニエ・ジャーミーの空間構成に関するメモ

るというよりも、自然の激しい地形そのままに路が未完  
成のままに作られている、という感じである。

当初、東京のような地形都市を予想していたのだが、日々、イスタンブールの街全体を歩き、踏破するに及んで、その根本的な違いを強く感じるようになった。それらの路は、路というより、人が自然と格闘して残された、轍の痕跡線なのである。

ではこれらの街の構造は、どのような特徴を持っているのだろうか。

イスタンブールという都市はきわめて複雑で多元的な構造を持っている故、もちろんそれを一言で語ることはできないが、そのいくつかをここで指摘しておきたい。

まず、イスタンブールの都市構造における重要なポイントの一つは、水である。海峡に面したイスタンブールには、実は川が一つもない。かつて、一本の川があったらしいが、現在ではそれもなくなっている。そこで、生活にかかわる水のネットワークを、どのように作るかということが、古来よりきわめて重要な問題であった。

冒頭に記したように、イスタンブールはもともと、ビザンツ帝国の首都であり、紀元2世紀から4世紀にかけて、古代ローマ時代の皇帝ハドリアヌスと、ビザンツ時代の皇帝ヴァレンスを中心として給水路が整備された。ヴァレンスによる水道橋は、現在も旧市街西部に遺構と

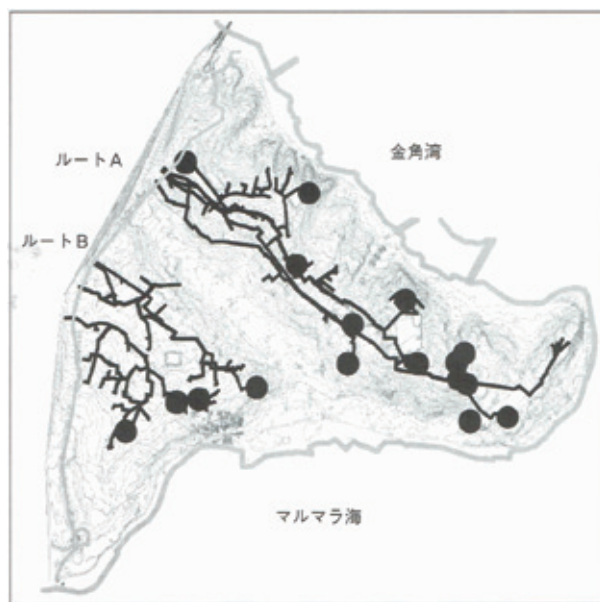


図5 旧市街のハルカル給水網路群（浅見泰司編『トルコ・イスラーム都市の空間文化』（山川出版社、2003）より引用）

して残っている。その当時は、イスタンブール旧市街の北西郊外に位置するハルカルという場所から水を引き、それが旧市街の中心部にまで供給されていた。ビザンツ帝国時代には、そうした水を保存する貯水庫が多数作られたようで、現在、中心部に残っている「地下宮殿」は、その代表的なものである。

こうした給水ネットワークが、オスマン朝を迎えて、その後の都市整備において参考にされた可能性は高い。オスマン帝国時代のイスタンブールにおいて、本格的な給水ネットワークの整備が複数の次元で行なわれているが、その代表的なものとしては次の二つがあげられる。

一つはハルカル給水路群で、旧市街の尾根に沿って作られたものである。[図5] これは、前述のビザンツ時代における給水ネットワークと類似しており、「七つの丘」をつなぐ稜線に沿うように、明確に計画されている。それは、太い幹からいくつかの主要な施設への水供給を意図していることが読み取れる。これは高い場所から低い場所に水を供給する、ということに加え、丘の連続線の部分にはモスクを始めとする重要な施設が配されており、それらの主要な施設に対して、安定した水の供給を考慮していたことが分かる。

そしてもう一つは、16世紀半ばに作られたクルクチェシメ給水路網である。[図6] これは建築家のシナンによって計画されたもので、前述のハルカル給水路網とは対照的に、旧市街の中心部において、尾根からかなり低いところに、網の目のようにネットワークが敷かれている。つまり、このクルクチェシメ給水路網は、ハルカル給水路網を補完するように、「丘の上をカバーする、主要幹線の水路軸」に対して、「丘の下をカバーする、編



図6 旧市街のクルクチェシメ給水路網（同図版5と同じ引用）

み目としての水路網」の役割を担っていたと考えられる。

これらの給水ネットワークに関連して、イスラム都市の計画において重要なのが、キュリエイという共同体のシステムである。これは簡単に言えば、都市施設の主要な集まりをまとめて計画し、コンパクトな共同体としての街を作るシステムである。このキュリエイは、基本的にはその中心にモスクが建ち、その周りを取り囲むように病院や神学校、商業施設などが配される。このキュリエイにおいては、ワクフという寄進制度を通して共同体全体でモスクを維持監理するシステムが成立している。そのため、神聖な場所としてのモスクにはたいてい、そこに隣接する形でバサール等が営まれ、多くの人が集まるにぎやかな領域となっている。[写真9] 例えば前述のスレイマニエ・ジャーミーも、その周辺に今も活動している様々な都市施設が作られており、大規模なキュリエイを形成している。

また、先の給水ネットワークおよびこのキュリエイに深く関連するのが、チェシメと呼ばれる水汲み場である。これはモスクや、そこに付帯するキュリエイの諸施設にはもちろんのこと、街中の様々な場所に象徴的に配されていることが多く、現在もその遺構を、イスタンブールの至るところで見ることができた。このチェシメはかつて、生活用水の安定的な供給に加え、そこに水を汲みに来る人たちの交流の場となっていたようであり、水のネットワークが、共同体における公共の小さな交流広場となっていたことが分かる。

こうしたことを鑑みると、地形都市としてのイスタンブールは、水の供給という都市活動に不可欠の要請を、その地理的特性に重ね合わせることで巧妙に各々の共同体を組み立てていたことが読み取れる。興味深いのは、



写真9 モスクに隣接して作られた、グランド・バザール

そうした起伏の激しい地形と迷路のような道路を持つイスタンブールの都市域において、モスクという礼拝空間がきわめて明快な特異点をなしていることである。まず、すべてのモスクがカーペットの敷かれた完全に水平な床となっており、靴を脱いで礼拝を行ない、多くの人々がたむろしている。つまり、それらはいわば、複雑な地形から独立した、公共のリビングスペースのようになっている。

例えば日本の寺社建築においては、参道や内陣・外陣の区分等により、むしろ自然から連続させて、意図的に段差や高低差を創り出すことで空間的なヒエラルキーを生み出していることが多い。しか偶像崇拝を禁止しているイスラムのモスクにおいては、礼拝空間にそうした区分はなく、平らな礼拝空間の中でムスリムとそれ以外の人が便宜的に居場所を分けられているのみである。また、すべてのモスクは南東のメッカの方向を向いているので、あちこちに分散配置されているように見える、大小様々なモスクの軸線により、街の中全体に強い方向性が生まれている。それが周辺の道路網に影響を与えている場合もある。

このように、地形としての都市の特性を十分に活かす一方で、それらの基準点となる、水平性と方向性を遵守するモスクがあちこちに点在し、グランドデザインの次元において、都市計画の明快な人為性を保証しているのである。

## 7. アジア側での生活など

現地での半年間は、アジア側に位置する、ユスキュダルという地区に住んでいた。ユスキュダルは、ボスポラス海峡のすぐそばに位置する住宅街で、都心だけれども古い街の気配が残っている、のんびりした坂の街である。[写真10, 11] この地区は敬虔なイスラム信者も多く、ヨーロッパ側とは一転してディーブで喧噪に満ちたイスラムの気配を帯びていて、興味深かった。このユス





写真 10 アジア側、ユスキュダル埠頭の風景



写真 12 住んでいたアジア側のアパート。窓の外には素晴らしい光景が広がる

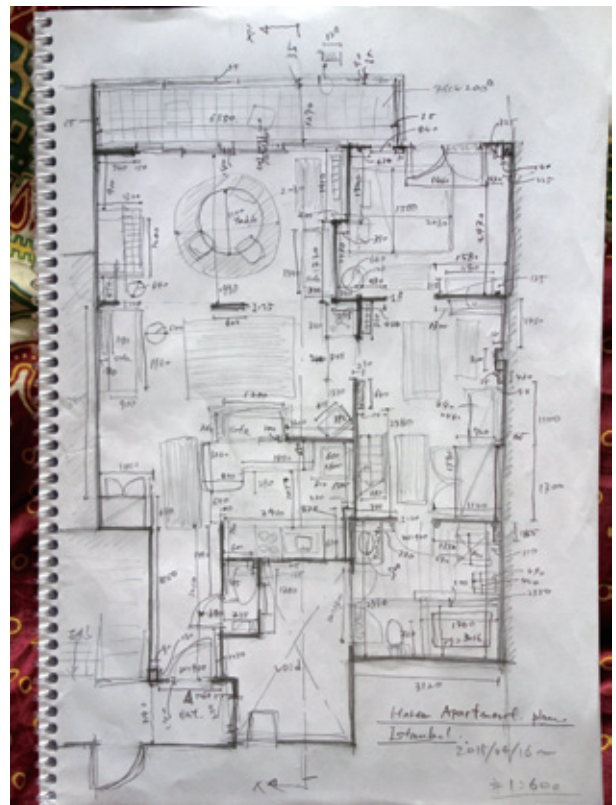


写真 11 夏のある日、ユスキュダルの広場にたむろする猫たちと、靴磨きの人、くつろぐ市民

キュダル地区は、東京の渋谷区と姉妹区の提携を結んでいるとのことで、東京で言えば確かに渋谷区や世田谷区のような都心に近い住宅街、という雰囲気はあった。ただし建物は中低層の古いアパート群が多く、戸建はほとんどない。

渡航前に、研究者のジラルデッリ青木美由紀さんに、ユスキュダルのアパートを紹介していただいた。青木さんはイスタンブールに約20年ほど住んでいる建築の研究者で、青木さんのご主人の友人であるイタリア人がイスタンブールに所有する、古いアパートを借りることができた。5階建てアパートの5階に位置する、広さ約90平米の1LDK+屋根裏部屋で、木目を基調とした古い部屋である。[写真 12] [スケッチ 3]

所有者のイタリア人のセンスが良く、トルコの伝統的なデザインによる古い家具や食器が部屋になじんでいて、雰囲気のあるインテリアを生み出している部屋だった。また、窓際にしつらえられたベランダからの、ボスボラス海峡の眺めが素晴らしく、毎日、本当に飽きることのない絶景を見ながらの、かけがえのない半年間だっ



スケッチ 3 住んでいた、アジア側アパートの部屋の平面実測スケッチ

た。短期間の観光では決して体験できない光景である。

3月末、アパートに到着したその日に、特に理由もなくいきなり大規模な停電となり、右往左往した。慌てて屋根裏部屋の箆筒から、使いかけのロウソクを探し出して、その灯のもとで海の夜景を見ながら夕食を取った。それも、今となっては良い思い出である。その後もたびたび予期せぬ停電に遭ったが、そのころには既に慣れて、ロウソクを常備し、停電のたびに燭台を使ってすぐに対応できるようになった。

毎週水曜日には、すぐ近くでパザル（青空市）が開かれ、有り余る野菜や新鮮な果物がめいっぱい店頭に並ぶのを見るのも楽しかった。特にトマトが豊富で、1個10～20円ほどと、驚く安さだった。キュウリや茄子、オレンジ、メロン、キャベツ、人参など、日本でもおなじみの野菜が安く大量に買えるので、毎週、パザルに足を運んで、両手いっぱいに買い物をするのが習わしとなっていた。[写真13]

街の人たちも皆、親切だった。都心でありながら下町の気配が残る、ユスキュダルならではのかもしれない。現在、イスタンブールは非常な速さで開発が進んでおり、郊外では巨大なマンション建設や大規模再開発が急ピッチで展開されている場所が多い。その過程で多くの古い建築や家屋が取り壊されており、私が滞在していた半年の間にも、金閣湾に面する、ガラタ地区の古い魚市場や野外レストランが、ある日、一瞬のうちに取り壊されて跡形もなくなっていたのには、非常に驚き、残念だった。ここの屋台で売っていた一つ6リラのサバサンドが、またこの上なく美味しかったのだが。そのような都市状況の中で、ユスキュダルはある意味で、いまだ牧歌的な下町の良さを残している、貴重な街だと言えた。

夏のさなか、夕方頃になって、散歩道となっているユスキュダル沿岸の道を歩くのがとても楽しみで、ジョギングをしている人たちが家族連れなどが海辺の散策を楽しみ、いつも賑わっていた。対岸の新市街と旧市街の街が次第に灯をともしていき、アヤ・ソフィアやスルタンアフメット・ジャーミーなどの世界遺産が、橙色にライトアップされて幻想的な光景を生む。

ときに、散歩道沿いに立ち並ぶカフェにふらりと入り、チャイを飲みながらイスタンブールやトルコにまつわるいろいろな本を呼んだり、海辺の光景をスケッチしたりした。[写真14] イスタンブールではともかくも、いろいろなカフェに気軽に入ってよくチャイを飲んでいたが、オープンテラスの居心地の良いカフェやにぎやか

なレストランが多く、帰国直前には、お気に入りのカフェがあちこちにできていた。[写真15] また、建築史的に重要とされているイスタンブールのモスクや建築施設群には、ほとんど訪れ、それらの違いについて、いろいろとじっくり見聞することができた。

渡航以前に、3ヶ月ほど日本でトルコ語教室に通い、現地でも2ヶ月ほど教室に通って、現地でトルコ語に囲まれているうちに、何となく簡単な言葉なら話せるようになった。それで、街中でちょっとしたやりとりで、トルコ語が通じるのが我ながら驚きで、面白かった。モンゴル語やハンゲルと並んで、同じアルタイ諸語の系譜として、トルコ語は日本語と文法がきわめて似通っているため、言語として取り付きやすい、ということも大きかった。一言、トルコを話した瞬間に、人々が打ち解けてくれるようなことが多かった。初対面の人たちに、「ジャポンヤ・ダン・ゲルディム、ベン・ミマルム」（日本から来ました、建築家です）と、トルコ語で自己紹介すると、現地の人たちはみな、大いに喜んでくれた [写真16]



写真14 ユスキュダルの海岸通りから見た、海とヨーロッパ側の風景



写真13 住んでいたアパートの近くで毎週開かれていた、パザル（青空市）



写真15 新市街側の路地の奥にあるオープンカフェ



アパートでは、ときどき、果物や料理を分けてくれた大家さん一家が、一度、部屋に招待してくれて食事をご馳走してくれたのだが、それがまたとても美味しかった。春から秋の初めにかけて滞在していたこともあり、日が次第に長くなり、8月になると夜の9時ぐらいまで空が明るかった。街の人々が夜遅くまで、オープンカフェでチャイを呑みながら談笑する姿が、住んでいる街の日常的な光景だった。

夕方頃、大学や街から戻ってきて、ベランダで研究書を読んだりしていると、カモメの群れが窓先を気持ち良さそうに飛んでいく。やがて、空が次第に暗くなっていき、海峡を船がゆっくり横切り、対岸のモスクをはじめとする建物が徐々にライトアップされる。すぐ近くのモスクから、礼拝の時間を知らせる、エザンの声が高らかに空に響き渡る。それらの重なりの中で、非日常のさなかにいることを、毎日、実感しつづけた半年だった。

[写真 17]

さらにトルコ滞在中には、夏休みを利用してトルコ国内の様々な他の場所も訪れた。イオニア地方のエフェソスやイズミル、プリエネ、ミレトス、ディディムといっ



写真 16 船や屋台が並び、賑わう旧市街のエミノニュ広場

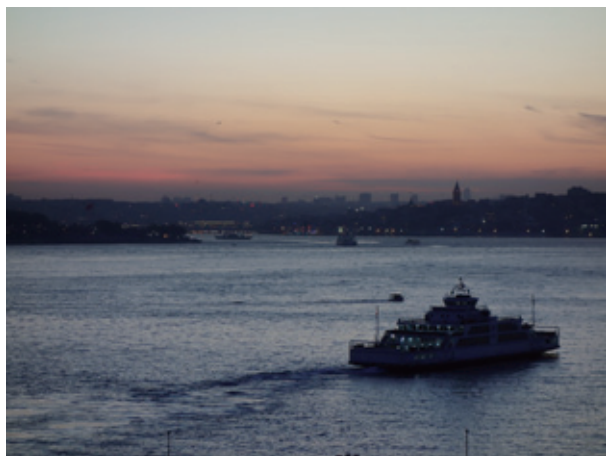


写真 17 イスタンブールの夜景

た、建築史的・都市史的にもきわめて重要な遺構が残る場所や、世界最大のドーム建築であるセリミエ・ジャーミーが残るエディルネ、オスマン帝国最初の首都であるブルサ、イスタンブール近郊のマルマラ海に位置するビュユック島その他の場所を多数訪問し、大いに刺激を受けた。それらの紹介については、また別の機会に譲りたい。

## 謝 辞

本研究は、平成 27 年度学外派遣研究として、国士館大学より給費を受けて実現し、きわめて有意義な研究滞在を経験することができた。学内の関係者の皆様に、記して感謝したい。

また、イスタンブールでの研究を受け入れていただいた、ミマール・シナン芸術大学副学長の Deniz Incedayi 教授、研究滞在の実務的なサポートをしてくださった、同大学助教の Hale Gonul 先生、トルコ建築家協会にご招待下さった建築家の Eser Yagci さん、通訳等で協力してくれた建築学生の大野エフラートゥン君、現地での生活等でいろいろと相談に乗ってくださった研究者のジラルデッリ青木美由紀さんと、ご主人でボアジチ大学教授のパオロ・ジラルデッリさんその他の皆さんに、深く感謝したい。

## 参 考 文 献

- 1) 浅見泰司編『トルコ・イスラーム都市の空間文化』（山川出版社、2003 年）
- 2) 飯島英夫『トルコ・イスラーム建築』（富山房インターナショナル、2010 年）
- 3) 深見奈緒子『イスラーム建築の世界史』（岩波書店、2013 年）
- 4) 榊屋友子『イスラームの美術－建築、写本芸術、工芸－』（東京美術、2009 年）
- 5) 野中恵子『史跡・都市を巡るトルコの歴史』（バレ出版、2015 年）
- 6) 鈴木博之ほか編『シリーズ都市・建築・歴史 3 中世的空間と儀礼』（東京大学出版会、2006 年）
- 7) 設楽国広監修『オスマン帝国 600 年史』（中経出版、2014 年）
- 8) 鈴木重『オスマン帝国－イスラーム世界の「柔らかな専制」－』（講談社、1992 年）
- 9) ジョン・フリーリ著、長縄忠訳『イスタンブール－三つの顔を持つ帝都－』（NTT 出版、2005 年）
- 10) 南泰裕「書と建築の交差点－建築へと越境する書の集合体／ミマール・シナンのモスク」（『墨』2015 年 7・8 月号連載（芸術新聞社））
- 11) 南泰裕「書と建築の交差点－空間の律動を生み出す画像／ブルサのウル・ジャーミーをめぐる」（『墨』2015 年 9・10 月号連載（芸術新聞社））
- 12) 南泰裕「書と建築の交差点－建築へと越境する書の集合体／エディルネのエスキ・ジャーミー」（『墨』2015 年 11・12 月号連載（芸術新聞社））
- 13) 南泰裕「トルコの建築事情」（『建築ジャーナル』2015 年 7 月号、建築ジャーナル社）
- 14) Emel Ardaman: Perspective and Istanbul, the Capital of the Ottoman Empire, Journal of Design History, Volume 20, Oxford university press, 2007